

## 未来眼とうほく 第1回 「未来眼やまがた」から通算第22回

# 東北は教育・研究基地を目指せ

少子高齢化の急速な進展により「大学全入時代」といわれるなか、全国から注目される大学が秋田県にある。その大学は2004年に秋田に開学した「国際教養大学（以下、AIU：Akita International University）」だ。AIUの中嶋嶺雄学長にうかがった。

### 革新的な大学が秋田にある

●町田 AIUは理念を「国際的に通用する真の国際人の育成」と掲げ、その実現のために「充実したリベラルアーツ（教養教育）」、「授業はすべて英語という徹底した英語環境」、「1年間の海外留学必修」という特長的なカリキュラムで人材育成を行っておられます。朝日新聞出版が発行する「2011年版大学ラ

ンキング」では「注目の新設大学」第1位、「教育分野の評価」第6位、「海外留学派遣」第1位、「外国人教員比率」第3位と、AIUの実績が高く評価されましたね。

●中嶋 おかげさまで、AIUのカリキュラムや取り組みを見たいと、毎日のように見学者が訪れています。はじめて卒業生を送り出した2008年の就職率が100%、09年が99.1%、10年は100%と、その好結果がマスコミに注目されたことも影響しているのかと思います。

●町田 AIUは就職率が高いだけでなく、伊藤忠商事、全日空などの大手企業に就職し、また大手企業がAIUの卒業生をリクルートするために、直接足を運んで大学で会社説明を開催するなど、AIUの卒業生は、大変注目されていますね。

●中嶋 卒業生の就職・進学状況は好調で、そのため本学を志す受験者数が年々増えています。

このように開学から短期間で注目された背景には、AIUの厳しい教育プログラムによって鍛えられた卒業生が、大学の理念である「世界を舞台に活躍できる人材」として活躍していることがあると思います。

AIUでは「海外留学が必修」となっています。海外で学んだ学生は、語学ができるだけでなく、英語で学び、自分の頭で考え、自分の意見を発言するなど、出発前とは見違えるように成長して帰ってきます。企業の採用担当者は、そのような点を高く評価してくれるのでしょ。

### 授業は英語、学ぶは教養、留学が義務

●町田 AIUの「すべての授業は英語」という徹底した英語環境や、外国人留学生との寮生活、海外留学の

国際教養大学 (AIU) <http://www.aiu.ac.jp/>

設立：2004年

学生数：763人 2010年4月現在

(東北出身者307人、秋田県出身者121人)

○外国人教員比率：50.0%

○海外留学派遣：172人

○海外提携校：31カ国・地域110大学

○学生専任教員比率：13：1 (2010年4月現在)



英語集中プログラム (EAP) では少人数授業で英語を学ぶ

義務など、他の大学では考えられない、チャレンジの機会に恵まれていることに大変感心しました。

●中嶋 AIUの学生は都会の利便性とかけ離れた自然豊かな環境のなかで、「これまでの人生で、これほど勉強したことはない」というくらい勉強します。

AIUに入学し、まず最初に「英語集中プログラム (EAP)」でアカデミック・イングリッシュを学びます。アカデミック・イングリッシュとは、英語で大学の講義を聞き、理解し、自ら発信して考えを述べ、論文をまとめることができる英語を言います。

このプログラムはTOEFL500点以上獲得できなければ修了できない、大変ハードなプログラムです。しかし、このプログラムで英語を集中的に学んだ学生は、3ヵ月ほどで国際情勢を討議できるレベルにまで英語力がスキルアップします。そして留学するための最低条件はTOEFL550点です。

●町田 また、AIUでは英語だけでなく、教養教育も重視しておられますね。

戦前は旧制高校が教養教育「リベラルアーツ」の役割を担っていましたが、このところ大学では専門課程が強調されて、教養教育が軽視されています。専門だけでなく、もっと広い「教養」、または「基盤」を、大学生の時期に養うのは、非常に大事なプロセスではないかと思っています。

●中嶋 AIUでは、教養教育を、「基盤教育」(Basic Education)と呼んでいます。基盤教育の特長は幅広い知識と教養を学ぶことで、ものごとを多角的な視点で観察・検証して論理的に考える力を養います。

基盤教育のカリキュラムには、東北の文化や秋田の文化について学ぶ授業もあります。東北の文化を学ぶためには、単に知識だけでなく、実際に出羽三山などに掛けて、フィールドでも学びます。

●町田 フィールドワークは、知識だけでなく、コミュニケーション力や、リーダーシップ力などの育成にも

役立ち、いわば人づくりの学習の機会になります。

●中嶋 秋田からこれまでいろんな逸材が誕生しています。アジア学の泰斗・内藤湖南や京都帝国大学の初代文科学長となってリベラルアーツの基礎を築いた狩野亨吉も誕生していますが、意外と秋田の人には知られていないようですね。

### 日本の大学を改革する

●町田 日ごろから私は「このままでは日本の将来はない、特に、豊かな社会で育った若い学生たちが、志を失いかけている」ことを痛感しています。

これまで他の大学には出来なかったことを、AIUでは中嶋学長のもとで大改革を行い、日本の大学教育に一石を投じていると思います。AIUの一つひとつの改革が、やがて日本全体の大学教育が変わる契機になるのではないかと期待しています。

●中嶋 かつて私は、海外の大学で教べんをとり、また東京外国語大学で学長を務めてきたなかで「このままでは日本が沈んでしまう」という強い危機感を持っていました。

それは日本人のコミュニケーション力、すなわち発信力が足りないことが理由にあります。日本以外の国々の人々は英語でどんどんコミュニケーションを取っているのに、相変わらず日本人は発言せず、発信せず、国際社会のなかで存在感がありません。



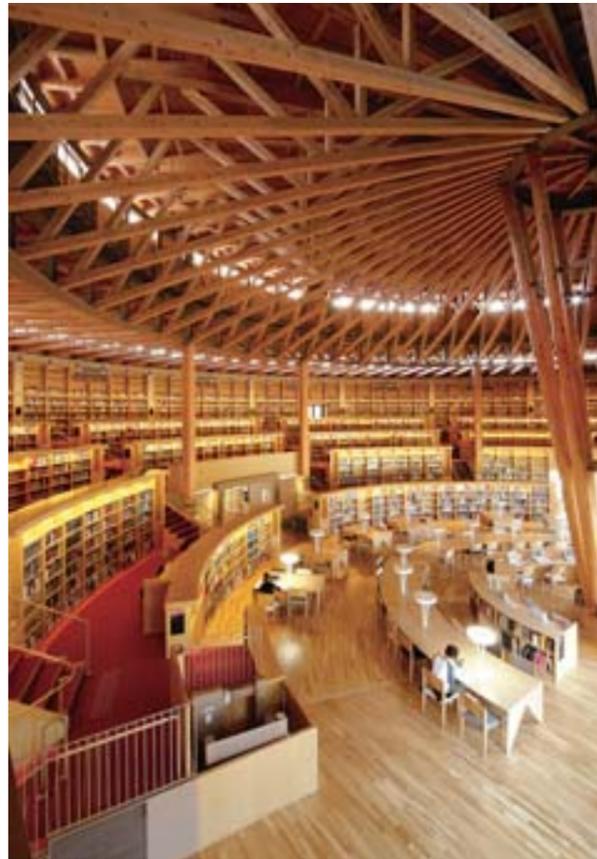
町田 睿 (まちだ・さとる)

1938年、秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年株式会社荘内銀行取締役副頭取、1995年取締役頭取に就任、2008年より取締役会議長。2009年10月1日より、フィデア・ホールディングス取締役会議長・北都銀行取締役会長。



中嶋 嶺雄 (なかじま・みねお)

1936年、長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了。社会学博士。国際社会学者。国際教養大学理事長・学長、社団法人才能教育研究会会長。東京外国語大学学長、国立大学協会副会長、アジア太平洋大学交流機構 (UMAP) 国際事務総長、財団法人大学セミナー・ハウス理事長、文部科学省中央教育審議会委員 (大学院部会長・外国語専門部会主査)、内閣教育再生会議有識者委員、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授などを歴任。



秋田杉を使った図書館は24時間オープン

日本の大学には英語学者、文法学者、英文学者などがたくさんいます。これまでの大半の授業は、テキストを読んで、訳し、試験をして単位を与えるというスタイルが進められてきました。

しかし、その方法では本当に必要な、伝わる英語は身につけません。まず、道具、すなわちコミュニケーションのツールとしての英語力を持たなくてはなりません。相手に伝わる英語を身につけてはじめて、英語を使うことができるのです。

これまでの日本の英語教育の仕組みを根本的に変えなければ、コミュニケーションができる英語力は身につけません。そのため、AIUでは英語教育の方法を根本的に変える新しい方法を開発しました。そして先ほどあげた「英語集中プログラム (EAP)」において英語をマスターした後は、基盤学習として英語での教養教育を行い、そして1年間の海外留学というプロセスを踏みます。

●**町田** これまで私は、山形県内の大学の経営協議会メンバーや理事などを経験し、第三者の立場から大学運営を拝見してきました。そのなかで、大学の学長のマネジメントは非常に大変であると感じてきました。

AIUでは中嶋学長の指揮の下、新しい発想でのカリ

キュラム開発、大学マネジメント改革を進められてきたのは、大変なご功績だと思います。

●**中嶋** AIUのようなカリキュラム改革やプログラム開発は、やろうと思えばどこの大学でもできると思います。しかし、このような取り組みを行っている大学は、まだ日本にはほとんどありません。

大学にとって、大事なものは「カリキュラム改革」ですが、このカリキュラムを動かすことは、同時に「人を動かす」ことになり、さまざまな難しさがあります。そのために、日本の多くの大学が、カリキュラム改革に二の足を踏んでしまうのです。

大学改革とは、お金をかければできるということではなく、教員の意識、リーダー層の意識、学長の意識のすべての改革なしでは進められないものなのです。

### 世界で通用するコミュニケーション能力を身につける

●**中嶋** 先日、中国とイギリスに出掛けてきましたが、日本の存在が本当に小さく、それに比べて中国の存在感が大きくなっていることを痛感してきました。特に、北京首都国際空港で中国の著しい成長を実感してきましたが、それに比べて日本は勢いが感じられません。頻繁に総理が変わる不安要素の多い国です。

これからは日本がその存在を世界にPRするために、発信力と、そのための英語力をきちんと身につけておくことが必要だとあらためて思いました。

しかし、英語だけができて意味がありません。大学教育でもっとも大事なことは教養教育、つまり、本格的な教養を身につけることです。

AIUではさまざまな分野で本格的な教養教育のできる教員を採用しています。フランスのソルボンヌ大学で美術の博士学位をとった教員、またプロのヴァイオリニストが教えてくれる音楽の授業などがその一例です。

また、1年間の留学を義務としていますが、学生は試行錯誤しながら、必死で学び、困難を乗り越えてきます。そのようなチャレンジの機会の一つひとつが学生を一回りも、二回りも大きな人間へと成長させ、高い就職率などの結果につながってきたのだと思います。

●**町田** 「鉄は熱いうちに打て」といわれるように、学生時代の若く吸収力のある時期に、いろんな世界を見て、困難なことに果敢に挑戦することはとても大事なことです。学生時代は過ごし方によっては、大切な時間をロスしてしまうことがあります。

学生時代こそ、コミュニケーション能力、自分を変

えようという「自己革新力」を磨く絶好の機会です。その点で、AIUではその「自己革新力」、「コミュニケーション力」を磨く機会を提供している大学と言えるでしょう。

### 秋田だからこそできた取り組み

●**中嶋** 今年の4月、国際基督教大学、立命館アジア太平洋大学、早稲田大学とAIUは「グローバル4大学 (G4) 交流」という連携協定を結びました。

そのねらいは国際的に通用する教養教育の充実を目指すため、4校が連携して学生交流、職員研修、キャリア支援を行うほか、他の3大学の学生が秋田のAIUへ短期留学するなどのプログラムを計画しています。

●**町田** いわば「国内留学」として学生同士の交流の機会も担っているのですね。

●**中嶋** 私は昔から、大学は景観やキャンパスの雰囲気大事だと考えています。東京の大学のように、狭い敷地の鉄筋コンクリートの建物の中でなく、自然のなかで学び、考えることが大切です。ですから、大学のキャンパスは木の香りがする、できるだけ自然に近い場所にあるべきだと思います。

日本の大学では、これまで学ぶ環境や景観についてはあまり重視されませんでした。その点AIUは、春にはミズバショウ、夏は美しい緑などの自然環境が身近にあります。学長室から歩いて1分で森に行くことができます。

●**町田** AIUの図書館を見学しましたが、非常にすばらしい図書館ですね。館内は秋田杉をふんだんに使い、天井が高く広々としたドーム型の建物、一歩足を踏み入ると木の香りが漂い、まるで森の中に入ったようです。そして英語の蔵書が豊富にそろえてあり、24時間、365日開館しているのには大変驚きました。

●**中嶋** 大学にとって図書館は中心的な存在です。コンビニエンスストアが24時間営業しているのに、なぜ大学の図書館は駄目なのかと主張し、AIUの図書館は、学生の「いつでも勉強したい」という思いに応える場所となるため、24時間、365日開館しています。

また、AIUは「世界に拓かれた大学」をキャッチコピーとしているので、大学には門や塀、きまった入口や裏口がなく、どこからでも自由に学内に入ることができます。他大学の門でよく見られるような「用のない者は立ち入るべからず」という看板はすべて取り除きました。だれでも入ることができる、オープンな大学を目指しています。



AIU、秋田、東北の未来について語る中嶋学長

これらは、秋田にあるからこそ、この秋田の地だからこそできたことです。私は、この地を1つのユニバーシティ・タウンにしたいと考えています。

### 東アジア、中国との付き合い方

●**中嶋** 山形と秋田はいろんな共通点や、似通ったところがありますね。

●**町田** 昨年10月に経営統合し誕生した、荘内銀行と北都銀行の共同持株会社「フィデアホールディングス」の関連会社として、今年7月に「フィデア総合研究所」が誕生しました。「フィデア総合研究所」は、荘内銀行と北都銀行のそれぞれのシンクタンク機能をひとつとして、秋田と山形さらに東北一円を俯瞰するシンクタンクを目指したいと思っています。

平安時代にさかのぼると、秋田と山形は「出羽の国」として1つの国でした。その後最上川を挟んで北の秋田県側を「羽後」、山形県側は「羽前」となりました。今、新しい動きとして、秋田と庄内を結んで連携を図る「秋田・庄内コリドール構想」が生まれています。

●**中嶋** 山形、そして秋田が結びつく今後大きな発展の可能性ががありますね。

●**町田** 「東アジアの時代」といわれながらも、日本海側の地域はインフラの整備がだいぶ遅れています。日本海側には、秋田・酒田・そして新潟という3つの港があります。日本海沿岸東北自動車道、つまり「日沿道」ができると、これから日本海側の秋田・酒田・新潟の3つの港が補完的な役割を果たすことができるようになります。

●**中嶋** AIUでも来年から「東アジア調査研究センター」を立ち上げようとして準備を進めています。最近、



AIU学長室での対談

AIUはウラジオストクの極東国立総合大学、中国の吉林大学など東アジアのさまざまな大学との連携協定もすすめています。

東アジア地域の大学と連携し拠点ができると、いろいろなネットワークができます。それをなんとか、秋田や東北の発展に結びつけたいと考えています。中国大陸だけでなく、台湾・香港・マカオまでネットワークを広げていくことができるのではないかと思います。

●**町田** 今の中国は、国家資本主義的な経済運営で大きな成果をあげています。一方で中国は、56もの多民族国家であり、国を一つにまとめるのは非常に難しいのではないかと思います。

●**中嶋** いま中国では孔子の教えを学ぼうという「孔子学院」があらちこちらに登場しています。かつて文化大革命の時に「批林批孔」という運動が起きましたが、今は孔子の教えが評価されつつあります。

その意味で中国は、近年ずいぶん変化していますが、このような動きにも政治的、戦略的な部分があるのは否めません。

●**町田** リーマンショックで明らかになったように、資本主義経済は、倫理的な基盤がなければ、行き詰まってしまう。市場万能主義のような動きは、いずれ大きく修正されることになるでしょう。最終的には中国は、例えば儒教の精神を取り入れることで、国が一つになっていく動きになるのではないのでしょうか。

●**中嶋** 儒教の精神とは、一人ひとりが「公共心を持っているかどうか」が大切になります。中国の経済はすさまじい勢いで成長し発展していますが、中国にはさまざまな問題があり、GDPは成長しても、中国の市民社会的な成熟には、まだ課題が山積していると思います。

中国が本当の意味で成熟した国家社会に離陸できるかどうか、日本はこれから注意深くみていかなくては

ならないでしょう。

## 地方は徹底して地方を生きる

●**中嶋** AIUには海外から多くの留学生、欧米ばかりか特に台湾・香港・韓国など東アジアからの留学生も学んでいます。台湾や香港などの雪を見たことがない学生は、秋田で初めて雪を見て、とても感激しています。

地方では「交流人口の拡大」をめざし、観光振興が課題とされていますが、日ごろ留学生と接して思うのは、これからは単なる観光だけではなく、観光プラスの何かがあればさらに魅力的な地域になることです。

観光に加えて、知的な関心を満たす大学がある秋田は、東北人だけでなく、日本人や外国人にとって、とても魅力的な地域なのです。

●**町田** 今のような、政治、経済、産業などが東京に一局集中する構造は、今後ますますリスクが高くなると思います。それは災害・テロだけではありません。情報や競争が過度に集中しすぎて、さまつな情報や無意味な競争が拡散して、本質が見失われるリスクが大きくなっているように思われます。

これから日本では、個性ある地域が多数できることが、日本全体の活力につながると思います。

秋田県や東北は、これまでのように産業誘致や工場誘致を目指すのではなく、これから、教育や研究基地として成長することが、大きな意味を持つでしょう。

●**中嶋** 地方は東京のまねなどせず、徹底的に地方の良さやメリットを生かし、地方を維持し、守ることが大事です。そこではじめて、世界に通用する力を発揮することができると思います。その点でAIUは、秋田から国際社会に貢献できる人材を多数生み出したいと思っています。

また、秋田には地域ならではの資源がたくさんあります。秋田の伝統的な祭りや「天神あやとり」を継承してなんとか残したいと、取り組んでいる学生もいます。

それらの活動には日本の学生だけでなく、留学生も積極的に取り組んでいます。日本の若者や留学生が、いままで気付かなかった、埋もれていた東北の良さ、また日本がこんなにも魅力的で豊かな国であることをあらためて気付かせてくれています。

●**町田** 今後AIUから日本、世界で活躍する人材がたくさん誕生することが大変たのしみです。今日はありがとうございました。

# 顔の見える消費者を求めて

フィデア総合研究所 主席研究員 加藤 和徳

## ■仙山交流“チャレンジ”マーケットの取り組み

6月末の日曜日。仙台で夜半から降り続いた雨も朝方には上がり、荘内銀行桂ガーデンプラザ支店の駐車場は午前中から多くの人でにぎわっていた。新鮮な山形の農産物や加工品、宮城の海産物を買求めるため、「仙山交流チャレンジマーケット」が主催する『山形&南三陸物産展』に集まった人垣だ。

「仙山交流チャレンジマーケット」は、山形駅西口広場で産直市を開催していたグループが中心となり「生産者が消費者の方と直接ふれあう機会を持とう」と、平成20年に発足した組織だ。現在の会員数は20団体で、ほかに賛助会員として宮城県の生産・加工業者3者が加入している。

会の代表を務める新関徳次郎さんの店頭には、旬の果物や山菜、米、味噌、漬物、当日の朝に“人が搗いた本物”の餅やおこわなど、数多くの郷土食材が並ぶ。これらの食材のほとんどは、スーパーや小売店に



仙山交流チャレンジマーケットで販売する新関徳次郎さん  
\*当日は、新関さんの妻のさとみさんによる「手作り漬物講座」、  
「大曾根餅つき保存会」によるつきたての餅のふるまいも行われた。

出荷することはせず、あえて直接対面販売にこだわっている。その理由を、新関さんは「スーパーや小売店に出すためにはある程度の日持ちが必要で、そのために余分な添加物などを加えなければならない。本当に自分たちが山形の旬でおいしいと思うものをそのまま仙台の人に届けたいから」と話す。さらに「直接販売することで市場価格に左右されることがなく、お客さまにも安く売れるし、最終的に売り手側の利益も大きくなる」と明かす。

「最初に仙台で出店を始めた頃は、山形からの出店が7店舗ほどあるだけ、お客さまも少なくて…」と新関さんは振り返る。その後、宮城県の生産者とのつながりから海産物などの出店数も増加してきた。ネットワークが広がるにつれて物産市を開催する機会も増え、最近では月に5回程度は仙台市内で出店する。

荘内銀行桂ガーデンプラザ支店の宇野寿人支店長によれば、回を重ねるにつれて、物産市の開催を心待ちにする地域の常連客も増えてきたという。

対面販売によって、何度も直接お客さまと接するうちに、山形にいただけでは気付かない、仙台ならではの売れ筋商品も見えてきた。「品揃えや商品開発を行う上で、どこで、誰に売なのかをまず明確にすることが重要だ」と新関さんは強調する。

「首都圏で売るとは考えないか」と聞くと、新関さんは、即座に「大都会では私たちの商品の良さが拡散してしまう。山形の良質なものを、目と手の届く仙台で売ることこそ、手応えがある」と答えた。

そこには自分たちが作る食材へのこだわりと、消費者とのつながりの中にこそ<sup>よ</sup>拠り所を見いだそうとする静かな気概が感じられた。

## ■“農業実験”レストラン「六本木農園」の挑戦

東京“六本木”と“農業”。地方に住んでいる者からみれば最も対極にあり、ミスマッチのように思える組み合わせかもしれない。しかし、六本木ではこの両者の融合を目指す複数のプロジェクトが進行している。その代表的な活動のひとつが、昨年8月20日にグランドオープンした“全国の農家・こせがれが作る農業実験レストラン「六本木農園」”だ。

店のコンセプト（合言葉）は、“生産者のライブハウス”。ミュージシャンが小さなライブハウスでライブを重ねてファンを少しずつ作り、いずれメジャーデビューを果たすように、地域のスターを発掘し、農家を売り出す試みだ。

店のシェフやバーテンダーなどの20人ほどのスタッフも、ほとんどが農家出身や農業に関心を抱く人々だ。スタッフは手分けをして全国を回り、六本木農園に食



六本木農園で「農家ライブ」を行う飯岡無記さん（茨城県）  
\*満席の客の前で、Uターン就農のきっかけや、自身が栽培するメロンやトマトへのこだわりについて思いを語りかけた。

材を納入する生産者を訪ね歩く。その中から、3ヵ月ごとに「今月の生産者」として数人をピックアップしてスポットを当てている。注目した生産者の食材でメニューを作るだけでなく、生産者のこだわりやアピールポイントを取材し、手作りのレポートを作成して店を訪れる人に紹介している。

さらに、六本木農園では、週1～2回のペースで仕入れ先の農家をゲストとして招き、「農家ライブ」を開催している。店の客に対し自分が作っている農作物をアピールしたり、生産者としてのこだわりや苦労話、農業にかける思いを自由に語ってもらう。

7月初旬の夜、六本木農園を訪れたその日も、店内の60席余りの客席は予約客でほぼ満席だった。店の一階は、白を基調としたオープンキッチン方式のレストラン。地下は“壁主”を募り全国から集めた畑の土を床壁・天井一面に塗り込め、シックな土蔵のように落ち着いた雰囲気醸し出すバー形式になっている。

コースメニューをオーダーすると、生産者直送の新鮮な野菜の盛り合わせや鍋物などが、適度な間においてテーブルに運ばれる。そのたびに、バーテンダーが食材の生産者やそのこだわりなどについて説明を添えていく。食事の最中に、当日「農家ライブ」を行う脱サラUターン就農の飯岡無記さんが、“農家仲人”と自称する店のスタッフと共に、客席の間を丁寧にあいさつに回っていた。コースの最後は、飯岡さんが自ら栽培したメロンのデザートで締めくくられた。ここでは、あくまでも食材を提供する生産者が主役だ。

店のプロデュースを手がける古田秘馬さんは「都会に住みながらも農業に関心のある人や生産者の声を聞いてみたい人が増えている」と話す。さらに古田さんは、農家ライブなどの取り組みを通じて「生産者が農業の楽しさや大切さを伝えるだけでなく、消費者の声を吸い上げることで生産やマーケティングに活用していける。一方、消費者にとってはマイファーマーを見つける目利きの場にもなる」と狙いを語る。

六本木農園でグランシェフを務める館野真知子さんの実家も、コメやブドウを生産する栃木県の専業農家だ。しかし、後継ぎはなく、父の代で8代続いた農家が終わるといふ。「それも時代の流れ…」と思いつつ、



六本木農園グランシェフの館野真知子さん  
\*六本木農園の店内はオープンキッチン方式でお客さまがおいしそうに食事をする顔が見えるようになっている。

何か自分にできることはないかと考えていた時に、六本木農園に出会った。

「食」に関心があった館野さんは、管理栄養士として7年間病院に勤務し、その後アイルランドの料理専門学校への留学を経て、フードコーディネーター、料理研究家として活動していた。館野さんは「私の仕事は、健康の源である食べることの大切さを伝えること。そして、料理で農家さんの気持ちをお客さまに伝えることで、農業を盛り上げていきたい」と考えている。

館野さんは「都会に住んでいる自分が直接農家をやるうとしてもできない。都会人としてできること、地方に住んでいるからこそできることがある。地方と都会が共に栄えるために、私たちは都会に住んでいるからこそできることをやっていきたい」と力を込めた。

## ■都市と地域、消費者と生産者の“絆”を取り戻す

かつて日本が高度経済成長を成し遂げ、大量生産・大量消費を推し進める風潮の中で、消費者と農業生産者の現場の距離は離れ、流通システムが肥大化することによってさらに互いの顔が見えなくなってしまった。また、大量流通時代に適応するため、日本の農家は一定の規格に当てはまる農産物を作ることが求められてきた。

一方、農家の側も、国の農業保護政策と相まって、生産した農作物をJAや市場に持ち込めば、基本的に全

量を引き受けてもらえる代わりに、自分では値決めができない仕組みに甘んじてきた。たとえ、自分の生産する農産物にこだわりを持ち、コストや手間をかけても、一般流通ルートに乗せれば全国一律の価格になってしまう。

このような状況の中で、農家の後継者不足と過疎化、高齢化が急激に進み、農村地域は疲弊してきた。

しかし、都市と地域、消費者と生産者が絆を取り戻し、生産者が価値を理解してくれる消費者とつながっていけば、大量流通方式による欠陥や弱点を補う道も開けてくるはずだ。

六本木農園の「農家ライブ」で、飯岡さんが自身の栽培への思いを熱く語り終えると、店内からは拍手が巻き起こり、「おいしいメロンの見分け方を教えて」という声や、「帰りにメロンを買っていくぞ」という声が掛かった。そこには、単なる生産者と消費者という関係を超えて、互いの信頼感に裏打ちされたワインウインの関係が芽生えたように感じられた。

仙山交流チャレンジマーケットの「目と手の届く」都市圏へ直接販売する試みや、六本木農園に集まる生産者や農家のこせがれたちのしなやかな活動は、都市と地域、消費者と生産者の関係性に变革をもたらすような、未知のパワーを秘めている。

最後に、プロデューサーの古田さんは「我々は“つながる場”を提供するだけ。中心となって行動するのは地域で農業などで頑張っている人たちだ」と語った。



夜半の六本木農園 外観

\*六本木農園は六本木駅から徒歩1分。六本木ヒルズから徒歩数分にもかかわらず、閑静な路地裏に立地している。